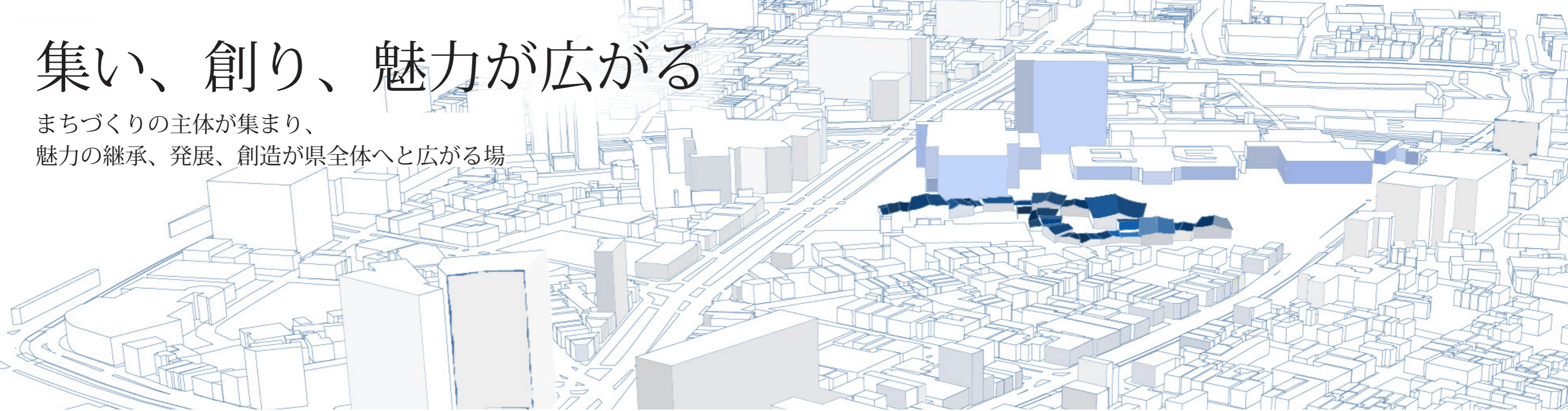


集い、創り、魅力が広がる

まちづくりの主体が集まり、
魅力の継承、発展、創造が県全体へと広がる場



富山のまちづくりにおけるリビング

私たちは、この場所を富山にかかわるひとすべてのまちづくりの中心拠点となるよう計画した。(ボトムアップ)。まちづくり団体などが集まり、富山の魅力の継承、発展、想像が県全体へと広がる場を作り出す。

都市デザイン構成

課題と背景

1. トップダウン体制のまちづくり

富山は戦後トップダウン形成の都市計画を展開し、都市機能の基盤が強化された。

2. コンパクトシティへの移行

2000年代にはコンパクトシティ戦略によって、インフラや人口の集約に取り組んだ。

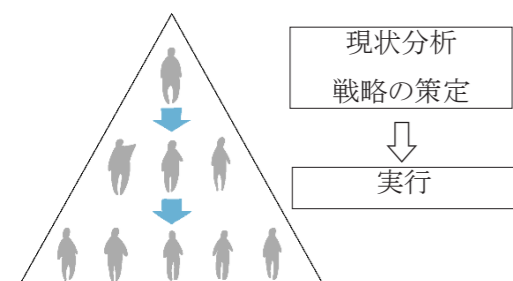
3. 都市化の進行

富都市の高密度化が進み、経済活動や消費が都市中心部に集中するようになった。

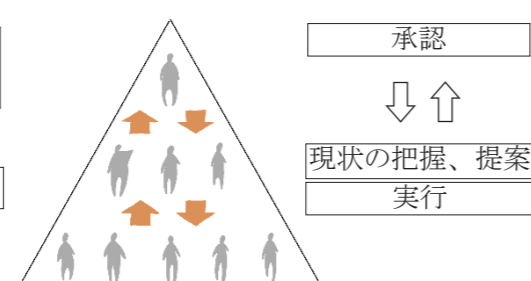
4. コンパクトシティによって実現された高密度化した都市において人々の交流や活動が盛んになると人々のつながりが促進される。

5. 様々な人々が関わり合い、新たな交流やコミュニティが形成される場としてこのエリアを再設計し、波及効果を富山県全体に広げる。

<トップダウン>



<ボトムアップ>



1. 神通川と都市計画事業

富山のまちは自然発生した都市だったため郊外地の統制、市内の不良地区の整理がなされていなかった。そこで幾度も氾濫する神通川の治水対策とともに富山市の都市計画事業が企画された。河川の蛇行部分の馳越工事は実施され水害は減少したが、廃川地は荒地となり市街地を南北に分断した。

2. 二大拠点

富山駅の誘致に伴って廃川地は埋め立てられて県庁や電気ビルなどが建設された。その後、空爆により焼け野原と化すが、戦後復興事業により現在の都市の骨格となる街路、富山駅前と総曲輪の二大拠点ががたづけられる。消費活動や経済活動も二大拠点を中心に行われる。

3. ひとの活動

現在の富山市は再開発事業やコンパクトシティといった政策により公共交通機関の発達とまちの回遊性が高められている。二大拠点の活動を繋ぎ中間地点にも人の動きがみられる。

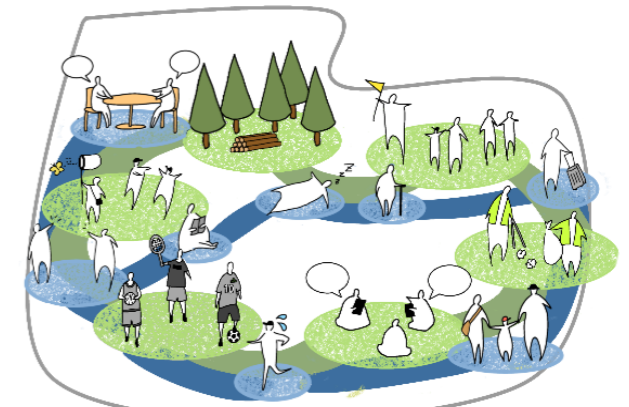
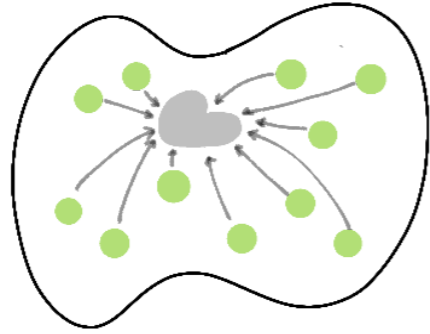
4. ソフト面の活動

これまで県庁周辺にそろえられてきた活動はインフラや施設といったハードな面からのものであった。そこで県庁周辺から新たにソフトな面の活動を生む。まちづくりの主体はまちに関わる人すべてにあるとして地域住民はもちろんのこと、観光客などの来訪者、企業までもをまちづくりの主体としていく。

富山のまちづくりの「リビング」へのプロセス

富山の「リビング」

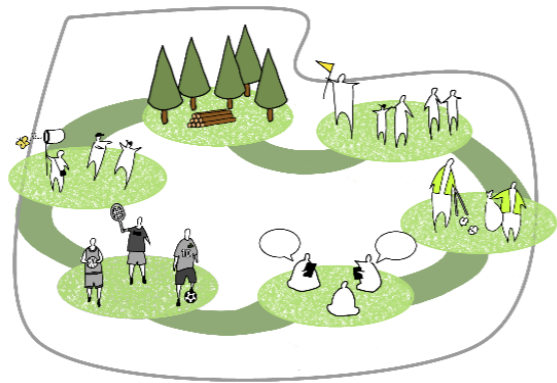
富山県内に分布している様々な「まちづくり団体」。また、富山市民に限らず、富山市外の住民や観光客など、「富山にかかわる人」の以上2つを、対等なまちづくりのプレイヤーとし、これらがエリアに集い、魅力の創造と発信の場とする「富山のリビング」を提案する。



フェーズ2—富山のまちのリビング

フェーズ1.1—まちづくり団体の連携

県の様々なまちづくり団体がエリア内に集まることで、同分野間の連携はもちろん、他分野での連携をとることができる。特に、行政街の中心拠点にあるという利点を活かし、市や県などの行政機関との連携がとりやすくなる。これによって、「団体と市」「団体と県」など、これまで実現しなかったまちづくり活動を可能にすることができる。



フェーズ1,2—人々の連携

富山市民、富山市外住民、県外住民、観光客など、すべての人々がエリアに集い、様々な形のコミュニティを形成することで「賑わいの創出」を目指す。コミュニティの大きさや種類は人の数だけ存在する。人々の賑わいは、「まちの豊かさ」につながり、個人の「ウェルビーイング」につながるため、効果的な連携である。

ここで、フェーズ1の「まちづくり団体の連携」と「人々の連携」の双方が重なり合い、相互的に連携しあう空間が創出される。全文にもある通り、リビングのプレイヤーは「まちづくり団体」と「富山に関わるすべての人」とし、それぞれのまちづくり団体による連携の取れた活動に市民や人々が参加することで、次世代のまちづくりの主体を生み出すこと絵を長期

ゾーニング

エリア内を「活動的な集まり」と「穏やかな集まり」の大きく2つに分けて場を設けた。

公園側には「活動的な集まり」として、新しく建築と活動のための広場を設けている。反対に県庁側に「穏やかな集まり」と、多様な集まりかたを可能としている

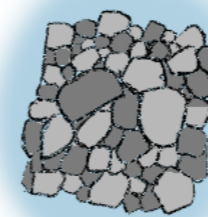
LRTからの動線と、城址通りからのウォークアブル動線の方向から人を集める

公園と県庁を分断していた道を、デザイン的に一体としたイベントの軸を設けた。イベント時には2つの異なるエリアを繋ぐ役割を担う

デザインのよりどころ

1. 石垣について—佐々堤

富山の戦国武将、「佐々成政」が治水のため築いた『佐々堤』は、洪水から富山城下を守ったとされている。この『佐々堤』の石垣を、建築のデザインに取り込んだ。



2. 切妻屋根について—立山×雪

富山県の立山に雪が降っている景観からインスピレーションを受け、切妻屋根を雪の積もった立山に見立てデザインに落とし込んだ。

